佛申させたまふべく候。このよしみな〳〵に申ふれられ候べく候。あなかしこ〳〵。

霜月二十五日　　蓮　如

四(能美郡)講　中

○

【興善寺文書】　能美郡　　二二五九

四講中年貢之分五千疋、又今月報恩講之志ニ千疋、何も返々志之至、ありがたくこそ候へ。能々披露あるべく候。穴賢々々。

十一月六日　　蓮　如　在判

四　講　中

(上書)加賀能美郡　四講衆中へ

○

【本光寺文書】　能美郡小松　　二二六〇

依其方望

一、紋白のけさ

一、四本ばしら

一、前しよく

一、しゆらう堂

一、たてがさ

一、長刀一ふり　是はかたみニ送り候。

光圓坊へ銀子二百目・絹一疋被上難有覺候。夫付あん心の事不珍(ママ)からずといへども、諸々の雜行を捨て、一心に彌陀如來今度の後生御介給候へとたのみ申人々、かならず往生うたがいあるべからず候也。穴賢々々。

五月八日　　蓮　如　在判

加州能美郡輕海之郷

本光寺殿

○

【善性寺文書】　石川郡　　二二六一

七高僧御影之事誂置候。出來候者可下候。次伊勢次郎ざへもん方分所領之事憑入候也。定而可申候。可被心得候。又同人きゝ、松岡へも此由可被(徳カ)待候。別而可申候へ

共、それへ申候。可被心得候。彼下向候者、無正躰者にて候。恐々謹言。

二月廿八日　　蓮　如　在判

大谷より

(上書)光□(開カ)坊□(御房カ)□

蓮　如

御返事

○

【善性寺文書】　　二二六二

尚々毎度音信煩、返々痛入候。

其後何事候哉と床しく候し處に、音信返々悦入候。丹後をそれへ下候。さだめて物語ども申候べく候。又鳥目五十疋分、慥請取申候。又當年世間物念之無何事候由申候間目出候。何樣ふと快候時分上洛候べく候。謹言。

七月十日　　蓮　如　在判

○

【專光寺文書】　金澤　　二二六三

尚々申候。色々念比之儀共悦入候。

當年爲祝儀之百疋滿足候。同自門徒三百疋悦入候。よく〳〵申され候べく候。三月廿五日之志五百疋、同燈明百疋難在候。同自門徒中貳千疋難在候。よく〳〵申され候べく候。報恩講之燈明參十疋、并志五十疋難有候。自門徒中燈明五十疋、同參百疋難有候。惣中へよく〳〵披露可有。恐々謹言。

五月廿八日　　實　如　在判

專　光　寺

御返事

○

【光德寺文書】　鹿島郡　　二二六四

爲志銀子三枚到來、遠路懇志之程難有覺候。就其當流の安心の趣といふは、更に余の方へ心をふらず、唯もろ〳〵の雜行雜善の心をふりすてゝ、一向一心に彌陀に歸命し奉る人々は、皆悉極樂に往生すべき事、努々疑あるまじく候。此上には佛法報謝のために念佛可申計ニ而候。此通り各々細々談合尤に候。穴賢々々。